

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：24405

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13178

研究課題名(和文)『水左記』註釈の作成による古代・中世移行期の研究

研究課題名(英文)The study on ancient and mediaeval Japanese history by annotation of "Suisa-ki"

研究代表者

磐下 徹 (Iwashita, Toru)

大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30589479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：『水左記』は平安時代後期に源俊房が残した日記である。平安期の貴族の日記には、儀式・年中行事の様子を中心に、朝廷内外の出来事が記録されている。これらの記事は、当時の政治・行政・社会の在り方を伝える貴重な史料である。また、『水左記』には1062～1113年までの記事が断続的に残されているが、この期間には摂関政治から院政へという政治形態の大きな変化が生じている。このことから、この日記は古代から中世への移行期の様相を知るうえで重要な史料であるといえる。

本研究では『水左記』の康平5～8年(1062～1065、康平8年=治暦元年)の註釈を作成し時代の大きな転換期である平安時代後期研究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『水左記』の康平年間の記事は、摂関政治から院政への過渡期の政治・社会情勢を示す貴重な史料である。しかし、当該期は同時代史料が少ないこともあり、古代・中世移行期という歴史的に重要な時期であるにもかかわらず、これまでの研究は手薄であった。

そうした状況のもと、本研究では『水左記』の詳細な註釈を作成し、当該期の政治・社会情勢や平安貴族の日記の使用法などについて明らかにできた。その成果は『稿本『水左記』註釈』などとして公表されている。

『水左記』の本格的な註釈はこれまででなされておらず、その意味で本研究は、今後の平安時代後期の研究の基礎となるものと自認している。

研究成果の概要(英文)：“Suisa-ki” is a diary written by Minamoto no Toshifusa, who was a court noble in Heian period. In diaries of this period, the events of the court society, which were mainly the state of ceremonies, were typically recorded. Analysis of these records enables to clarify how politics, administration, and society of the time is going on. In “Suisa-ki”, the pieces written in 1062-1113 have been in existence intermittently. These years correspond to the transition period from the ancient times to the medieval times. Therefore, this diary is an important resource to understand the dynamic transition in the course of history.

In this study, the pieces of “Suisa-ki” limited in Kohei 5-8 (1062-1065 A.D.) were introduced with the annotation in detail and advanced the research of the late Heian period.

研究分野：日本古代史

キーワード：『水左記』 源俊房 古記録 日記 古代・中世移行期 註釈

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日記や儀式書の読解にもとづく平安時代史研究は大きく前進した。しかし、平安期を通じて偏差なく日記類が残されているわけではない。

10世紀には『三代御記』や『貞信公記』『九曆』などが、11世紀に入ると『御堂関白記』『小右記』『権記』など豊富な日記が残される。これらをもとに摂関政治の成立・展開の具体相をはじめ、政治・行政・社会の仕組みが解明された。しかし11世紀後半になると現存する日記が減り、『春記』や『水左記』を除くと『土右記』などの逸文が知られる程度となる。

その後、12世紀初頭頃から『後二条師通記』『中右記』『長秋記』『殿曆』など豊富な内容を備えた日記が再確認できるようになる。これらから院政の成立・展開の具体相など、摂関期とは異なる政治・行政・社会の在り方が明らかにされた。

従来の研究では、上記のような残存史料の少なさに起因して、11世紀後半～12世紀初頭の研究が手薄となっていた。

こうした状況を踏まえると、1062年～1113年にかけて記事の残る『水左記』は注目すべき史料といえる。『水左記』の時代は、院政・荘園制・武家政権といった中世社会を特徴づける諸事象の萌芽が見出される時期である。したがって『水左記』の註釈を基盤とした古代・中世移行期の研究は、これまで手薄だった当該分野の研究の深化を進展させる有効な方法である。

これに加え、『水左記』には康平7年記をはじめ自筆暦記が残されており、研究の広がりにも期待できる。

しかし、本研究の開始段階においては、『水左記』の本格的な註釈は公表されておらず、11世紀後半～12世紀初頭の研究の基礎となるべき作業は不十分な状態だった。

2. 研究の目的

本研究では、『水左記』の註釈を基盤に古代・中世移行期の具体相を解明することを目的に掲げた。その理由は、既述のように当該期が時代の転換点であるにもかかわらず、研究の深まりが不十分だからである。

『水左記』は11世紀後半～12世紀初頭の記事が残る良好な史料であるにもかかわらず、『水左記』全体の本格的な註釈は公表されていない。そこで、『水左記』の註釈を基盤に古代・中世移行期の具体相の解明に取り組むことを目指した。

註釈の作成に際しては、語義や人名などの説明を付すという単純な作業にとどめず、『水左記』以外の日記や史書、古文書、法制史料、儀式書、説話などに幅広く当たり、日記の個々の記事をそれぞれの状況に即して解釈することを目標とした。また、自筆暦記の残る康平7年記については、筆跡や筆勢、墨の色、料紙の使い方などにも留意した註釈を作成することとした。

3. 研究の方法

本研究では、古代・中世移行期の具体相を明らかにするため、『水左記』という史料の註釈作成という、歴史学の基礎的な研究方法をベースとした。

基盤となる『水左記』の註釈については、まず自筆暦記の残された部分はそれを、それ以外の部分は良質な写本を取捨選択して《校訂本文》を作成し、それをもとに《書き下し》を提示した。さらに《註》として、語義・人名等の解説にとどまらない日記の記事の解釈を、関連する先行研究や史料とともに提示した。自筆暦記については、料紙の使い方、文字の書き方(訂正痕や重ね書きなど)を丁寧に観察し、その所見も《註》に反映させた。

こうした精密な『水左記』の註釈を作成することで、

- ・『水左記』の時代の政治・行政・社会
- ・当該期の日記の使われ方とその社会的意義や貴族社会の情報ネットワーク
- ・平安京を中心とした社会状況の変遷

について考察するための基盤を整え、古代・中世移行期の研究を深めることとした。

なお、註釈の母体として、研究代表者を中心とする「水左記輪読会」を立ち上げ、輪読会参加者には研究協力者として本研究に参加していただいた。輪読会は月に1回を原則に開催し、康平年間の『水左記』の記事の検討と註釈の作成を進めた。

4. 研究成果

本研究の成果の最たるものは、上記の目的・方法にもとづき作成された『水左記』の註釈である。研究期間中(2020年度～2022年度)に康平7年(1064)4月～康平8年(=治暦元年)6月の註釈を作成した。これに先立ち作成していた康平5年以来の註釈と合わせ、『水左記』康平年間の註釈を完成させることができた。

これらは大阪市立大学(大阪公立大学)大学院文学研究科紀要『人文研究』第71～74巻および、『岐阜聖徳学園大学紀要』第59～62集(ともに2020～2023年)にて公表し、治暦に改元された康平8年を除く康平年間の記事・註釈については、再検討を経て『稿本『水左記』註釈(康平年間)』(水左記輪読会、2023年)として刊行した。これらの註釈は、研究代表者を含む輪読会

参加者（研究協力者）により執筆されたが、輪読会での議論・検討を前提としたものである。

以下、今回の註釈より明らかになったことのうち、古代・中世移行期（平安時代後期）の政治・行政・社会・文化の様子をよく示していると思しき記事を研究成果として紹介する。記事や註釈の詳細については、上記紀要を参照されたい（ともに機関リポジトリにて閲覧可能。『人文研究』

<https://www.omu.ac.jp/library/information/repository/>、『岐阜聖徳学園大学紀要』
https://shotoku.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=135&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=21）

（１）康平５～６年 この期間は写本（抄出本）のみが残されており、記事も断片的であるが、興味深い記事が散見する。

康平５年２月１９日条

この記事は誤字・脱字などが想定されるため難解だが、記主の源俊房が、自身の所持する小野道風筆の白居易の詩の手本（『白氏文集』那波本 3、諷諭 3、新楽府収録の「昆明春水満」）を、藤原知家に貸し出した記事と解釈した。俊房も知家も能筆として知られることから、当時の書家の交流を示す興味深い記事と考えられる。

康平６年２月１６日条

前九年合戦により討ち取られた安倍貞任らの首が、平安京にもたらされた際の記録である。従来からよく知られた記事ではあるが、今回の註釈作成により、首をさらした西獄の門前の様子などをより詳細に明らかにすることができた。

康平６年６月２日条

俊房が祈雨奉幣の上卿（儀礼・政務の執行責任者）をつとめた際の記事である。奉幣にかかわる諸手続きの次第が記されているが、俊房は自身を指して「上卿」と表現しており、日記の記事と儀礼や政務の次第をまとめた儀式書等との関係を示唆する記事といえる。

（２）康平７年 この期間は自筆本が残されている。ただし、途中には欠損部もあり、料紙の上下の破損により判読が難しい箇所も散見した。これらについては、「宮内庁所蔵資料目録・画像公開システム」にて閲覧可能なカラー画像や、1954年に刊行されたモノクロの複製版をもとに詳細に観察し、文字の読み取りに努めた。

２月１１日条、３月１６日条

ともに画像等の観察により、従来は翻刻を改めることができた。特に３月１６日条からは、俊房が時の関白藤原頼通のことを「殿」とも呼称していたことが明らかとなった（通常は「殿下」と呼称）。

３月１６日条

ここには抹消の印と思しき墨線が確認できる。従来は漠然と抹消を意味すると考えられてきたが、記載様態の詳細な検討から、記事の重複を修正するものであると推定した。つまり、俊房は日記の記事を後日にまとめて記載していた可能性を指摘することができた。

３月１８日条

正月の行事である賭弓の記事だが、関係史料との対合により、この時期には故後朱雀天皇の忌日を避けるため、式日が変更されていることを指摘できた。

４月５日条、５月２４・２９日条など

この頃より病の記事が目立つ藤原頼通の辞関白表に関する記事で、この頃の頼通の動向や辞表のやりとりに関する作法などについて再整理することができた。

閏５月３日条

頼通の物忌に関する記事であるが、従来は料紙の破損のため末尾の文言は翻刻されていなかった。今回、カラー画像の詳細な検討により、残画や他の日記の用例等から、本来の文言を推定・復元することができた。

閏５月１９日条

「二条辺」で発生した火災に関する記事だが、この時の罹災者のなかに禊子内親王（後朱雀天皇皇女）と思しき「前斎院」が含まれている。俊房の父師房が家司をつとめるなど、彼女は村上源氏とのつながりが強い。実際に、この時も罹災した彼女は俊房の邸宅に身を寄せている。禊子内親王はしばしば歌合を主宰するなど、当該期の歌壇の中心的存在となるが、その背景に師房の影響が指摘されている。この記事の註釈により、当時の歌壇の背景をなす人間関係を再確認することができた。

閏５月１１日条

月次祭の記事だが、上卿をつとめた俊房は、この日の記事でも自身を「上卿」と表現している。

閏５月１５日条など

これらの記事では、平等院鳳凰堂を含む頼通の宇治別業の様子が詳しく記される。また、橘俊綱の伏見亭など、平安京と宇治の中間にあたる伏見(臥見)の様子もうかがえる。今回の註釈により、当該期の平安京近郊の開発の様子を具体的にとらえることができた。

7月23日条

天喜6年(1058)に焼亡した大極殿の再建に関する陣定の記事である。この時の再建は、延久4年(1072)にようやく実現するが、そこに至るまでの経緯や造営の賦課方式などについて改めて整理することができた。

7月25日条、29日条

ともに判読不明の文字が含まれる。従来の刊本では、当該部分は欠損を示すナガハコの記号に翻刻されているが、原本の複製(モノクロ)の観察の結果、文字は存在するものの、判読が極めて困難であることが確認された。これらは破損のある料紙の下部で、現状に表装する際、紙のずれなどが生じた可能性が想定される。今後の課題として、原本観察の必要性が明らかとなった。

9月1日条

前日に開催された除目の任官者が、宇治に滞在する頼通のもとに赴いて謝意を表した記事。この時期の頼通は平安京を離れて宇治に滞在することが多いが、任官者がわざわざ宇治に出向いていることから、当該期の頼通がまだ影響力を維持していたことを確認できた。

10月13日条

時の後冷泉天皇が祖母に当たる上東門院彰子の東北院に行幸した時の記事。晩年の彰子や事例の少ない東北院行幸の様子を具体的にとらえることができた。

10月19日条

源頼義と源国房の美濃国での勢力争いに端を発すると思しき事件についての陣定の記事。当該期の清和源氏の動向や美濃国の情勢を考える基礎的な情報を整理できた。

11月9日条

春日祭に際して、頼通が氏長者として奉幣するために東三条殿に入ったものの、異母弟の長家の死去により奉幣を取りやめた記事。従来、東三条殿と摂関・藤氏長者の地位との結びつきは、頼通の子である師実の時代頃からと考えられることが多かったが、この記事の検討により、そうした関係性が頼通の時代までさかのぼりうることを示すことができた。

(3) 康平8年 = 治暦元年 自筆本の残存期間がおり、再び写本(抄出本)のみが残される時期となる。

正月7日条

俊房の父師房の任右大将にともなう着陣儀の記事である。儀礼化したものであるとはいえ、近衛府内での文書行政の具体相を確認することができた。

6月3日条

俊房の父師房の任内大臣にかかわる行事の記事である。師房が、道長や頼通の作法を意識しながら儀式に臨んでいることが確認できた。また、註釈作成の過程で、師房の日記(『土右記』)の逸文についても検討を深めることができた。

6月22日条

神功皇后陵・成務天皇陵の鳴動に関する記事。両陵と石清水社との結びつきが当該期より形成されていたことを確認できた。また、諸写本の校合により、増補史料大成本では脱落していた記述を補うことができた。

以上の研究成果は、研究代表者が主催する水左記輪読会において参加者(=研究協力者)全員で検討したものである。ただし、註釈作成に際しては担当範囲を設定し、それぞれを記名原稿として公表している。以下、註釈の執筆担当者の一覧を掲載しておく。

康平5年

正月・2月・5月(磐下徹)

康平6年

正月・2月1~16日(久米舞子) 25~27日・3月・7月(堀井佳代子)

康平7年

正月・2月(北村安裕) 3月1~17日(堀井) 18~27日(磐下) 28~30日(宮川麻紀)・4月1~3日(宮川) 4~19日(久米)・5月17~21日(北村) 22~30日(堀井)・閏5月1~7日(宮川) 8~16日(磐下) 17~19日(北村) 20~29日(久米)・6月1~8日(重田香澄) 9~14日(黒須友里江) 15~29日(堀井)・7月19~26日(磐下) 27~30日(宮川)・8月1~8日(重田) 10~15日(久米) 16~29日(堀井)・9月(北村)・10月1~15日(黒須) 16~30日(重田)・11月(磐下)

康平8年（治暦元年）

正月1日（久米）7日（久米、磐下）23日（磐下）・3月22～29日（宮川）・4月1日（宮川）2日（黒須・堀井）5日（堀井）・6月3日（北村・重田）

なお、研究代表者は、平安時代や古記録に関する書評執筆や研究報告などもおこなった。これらは、上記註釈の作成の前提をなすもの、あるいは註釈作成の結果と位置づけられるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 磐下徹 | 4. 巻 94 |
| 2. 論文標題 書評と紹介 梅村喬著『尾張国郡司百姓等解文の時代』 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 古文書研究 | 6. 最初と最後の頁 126-128 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| 1. 著者名 磐下徹・久米舞子・宮川麻紀・黒須友里江・堀井佳代子 | 4. 巻 74 |
| 2. 論文標題 『水左記』註釈（治暦元年正月～四月） | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 大阪公立大学大学院文学研究科、『人文研究』 | 6. 最初と最後の頁 124 125、128-131 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 磐下徹 | 4. 巻 130-8 |
| 2. 論文標題 書評 細井浩志編『新陰陽道叢書 第一巻 古代』 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 史学雑誌 | 6. 最初と最後の頁 86-92 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 北村安裕・磐下徹・黒須友里江・重田香澄 | 4. 巻 61 |
| 2. 論文標題 『水左記』の研究 康平七年九月～十一月 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 125 142 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 磐下徹・宮川麻紀・重田香澄・久米舞子・堀井佳代子 | 4. 巻 73 |
| 2. 論文標題 『水左記』註釈(康平七年七月・八月) | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 大阪市立大学大学院文学研究科紀要『人文研究』 | 6. 最初と最後の頁 169-184 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 北村安裕・久米舞子・黒須友里江・重田香澄・堀井佳代子 | 4. 巻 60 |
| 2. 論文標題 『水左記』の研究 康平七年閏五月～六月 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 75 90 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 磐下徹・久米舞子・北村安裕・堀井佳代子・宮川麻紀 | 4. 巻 72 |
| 2. 論文標題 『水左記』註釈(康平七年四月～閏五月) | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 大阪市立大学大学院文学研究科紀要『人文研究』 | 6. 最初と最後の頁 161 173 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 磐下徹 |
| 2. 発表標題 平安時代の受領任国統治の一考察 初任時の対応を中心に |
| 3. 学会等名 国史学会大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 水左記輪読会（磐下徹・北村安裕・久米舞子・黒須友里江・重田香澄・堀井佳代子・宮川麻紀） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 水左記輪読会 | 5. 総ページ数 173 |
| 3. 書名 『稿本『水左記』註釈（康平年間）』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 北村 安裕 (Kitamura Yasuhiro) | | |
| 研究協力者 | 久米 舞子 (Kume Maiko) | | |
| 研究協力者 | 黒須 友里江 (Kurosu Yurie) | | |
| 研究協力者 | 重田 香澄 (Shigeta Kasumi) | | |
| 研究協力者 | 堀井 佳代子 (Horii Kayoko) | | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 宮川 麻紀 (Miyakawa Maki) | | |
| 研究協力者 | 山本 真由子 (Yamamoto Mayuko) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |